慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	堀経夫著 イギリス社会思想史概説 ; 水田洋著 社会思想小史 ; 社会思想史の旅 : イギリス
Sub Title	
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.4 (1957. 4) ,p.335(105)- 338(108)
JaLC DOI	10.14991/001.19570401-0105
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570401-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

官僚化した指導者たちは、この労働者の戦闘的精神をおそれ、これを弱めるような行動をして、その結果折角もり上った労働運動を失敗に終らせたと指摘している。フォスターは、自分の長い間の闘争の体験から、労働組合は、保守的な右翼社会民主主義者の影響を排除すべきであると主張する。では各国の労働運動は、どのような発展をしたか。

※　※　※

イギリスでは、階級闘争のもっとも活潑な時期に、労働組合は飛躍的な前進をとげている。一八三〇年から四八年までの、オーエンの時代とチャーチスト運動の時期、つぎに一八八九年のロンドンの大ドック・ストライキであり、これはいままで排除された不熟練労働者の大衆を、職業別組合に加入させた事件であり、また一九〇八年から一四年の戦闘的な大衆のストライキは、のちに一九一四年から二〇年にわたる石炭、運輸、交通の三部門の同盟組合にまで発展させた。そして第一次大戦直後の世界的な労働運動の昂揚、最後に第二次大戦直後の組合運動の発展というように、その間に多くの沈滞や退歩がありながらも、労働者階級は、ブルジョア的な考え方からぬけ出ようとして、大きな進歩をとげた。

ドイツの場合は、大体三つの高い峰（ピーク）が見出される。一八九三年社会主義鎮圧法撤廃後の労働運動の急速な発展、第二に第一次大戦後の革命的な状勢のもとにおける熱狂的な昂まり、最後に第二次大戦後の急速な再建。

フランスでは、一九三五年から三七年にいたる人民戦線内閣のもとでの発展で、C・G・Tの組合員は一〇〇万から五〇〇万に増加し、フランスにおけるファシズム勢力の増大をおさえることができた。

またアメリカの労働組合の歴史は、イギリスと同じく、急速な発展と組織的・イデオロギー的な停滞の交代が特徴的な形であらわれている。すなわち、一八二七年から三三年にいたる激動の時期、南北戦争直後の闘争と組合建設の時期、一八七七年から九六年にいたる発展する帝国主義の時期のもとにおける闘争、一九一八年から二〇年にいたる第一次大戦後の組合の膨脹の時期、それから一九三三年から四八年にかけてのすさまじい発展、そしてこの最後の時期にC・I・Oは産業別組合を組織し、一九三三年の三百万から一九四八年の終りには一六〇〇万に、その組合員を増大させたのであった。

フォスターはさらにイタリヤ、日本、中国などについて、その分析をつづけているが、要するに、労働組合運動が発展するためにはその主体的な条件として、労働者階級の自発的な戦闘精神がたかまり、また客観状勢が労働者階級に有利に展開し、さらにその上に労働者階級の力をもっとも有効に結集させる指導的な理論こそ必要かくべからざるものであると主張している。

世界の労働運動の歴史をみるに、われわれはその背後によこたわっている三つの大きな流れを見出すことができる。すなわち右翼社会民主主義、アナルコ・サンディカリズムおよび共産主義であって、これらは、労働者階級の闘争の波のはげしく打ちよせる時にも、また労働運動が比較的静かな時期にも、それぞれ異なった態度をとったのであった。

右翼社会民主主義者は、階級闘争の最小限に自分自身をおいて、日日の小さな仕事だけを問題にしている。彼らは改革の擁護者であって、革命の敵である。言いかえれば彼等の主張する社会主義は、プチ・ブル的な改革にすぎない。

他方無政府主義者（アナーキスト）は、労働運動において、右翼社会民主主義者とは逆に、まったく極端に走っている。すなわちアナーキストたちは、日常の要求や闘争、そして組織などの、きわめてさしせまった仕事は無視し、大衆の自発的行動のみ過大評価することである。その結果は、労働者階級のもり上る力を浪費するばかりで、その組織を破滅させることになりやすい。では共産主義者はどうするか。

フォスターはつぎのように言う。

共産主義者はまず、労働者階級の自発的な力と、戦闘的精神の週期的な表現の重要性とを充分に評価するが、しかしまた彼等は、つぎのことをよく理解している。つまりこの労働者の戦闘性は巧みに訓練され、組織されそして指導されるのでなければ、現代の条件のもとでは失敗するにちがいないということである。そして最後につぎのようにつけ加える。この一節は実際に労働運動に従事している者はもちろん、労働運動の歴史を研究するわれわれも、大きな示唆をあたえられる。

「戦闘的な労働組合員は、労働組合運動の発展の一般的な法則についての生きた知識をもつ必要がある。これによって彼等は、階級闘争の二つの面において、もっと有効に働くことができるであろう。つまり労働者階級がわずかに進化的に発展するより静かな時にも、また革命的な飛躍をとげる戦闘的な動乱の際にも。活潑な闘争の時期をもてあそび、これを低く評価しようとする社会民主主義者の誤った傾向や、労働者の間の戦闘的精神をゆがめて評価するというアナルコ・サンディカリズムの傾向をさけながら、共産主義者および他の左翼主義者たちは、この両方の時期を理解し、極力これを利用しなければならぬ」と。

これは、フォスターが長い間の闘争から学びとった貴重な教訓でもあったろう。

なお、本書は最近、塩田庄兵衛氏等によって翻訳出版された（理論社、上、下二巻）。

（飯田　鼎）

書評及び紹介

堀　経夫著
『イギリス社会思想史概説』

水田　洋著
『社会思想小史』
『社会思想史の旅―イギリス―』

経済学の歴史が、宗教運動、農民運動、労働運動等を含む社会の

歴史的発展とのつながりにおいて、広く思想としての理解が重要なことが強調されて以来、社会思想史が重要視され、一貫した思想史を書き上げようという努力が、従来数多くなされて来た。特に、ブルジョア革命、産業革命が最も早く到来したイギリスは、経済学の祖国であると同時に、「ユートピア」の国であり、近代唯物論の本来の故郷（エンゲルス）であり、労働運動の最も早い国である。これまでの社会思想史は、常にここを中心として書かれて来たし、他国の思想史の研究も、常にそれとの対比において論じられ、そのためにもイギリス社会思想史の深い専門的研究が要求されてきた。古典的なものには Max Beer: The History of British Socialism 等もあるが、堀氏によって独自の通史が現われたことは喜ばしい。

内容は十八世紀以後のみを扱ったもので、スミス、マルサス、土地改革論、ベンサム、リカード派社会主義、チャーチズム、フェビアン主義である。通史としては、モアや農民運動、ベイコン、ロック、ホッブス、ゴドウィン、オーエン等に触れなかったのはいかにも残念であるが、それだけに対象を精選して論を展開するということであろう。著者の抱負としては、社会思想というものをかなり広く解釈し、「従来わが国の学界であまり取扱われていなかったものについて、能う限り原本または原資料によって研究した結果をまとめたこと。」（序文）である。

水田氏の「小史」は、これと対照的に、ギリシャから伊英仏独とまんべんなく筆を及ぼしている。著者によれば「このような、ちいさな本で、古代から二十世紀はじめまでの社会思想の発展を、たどろうとするのは、無謀といわれるかもしれない。わたくしじしんも、そのことを、否定するつもりはないけれども、それにもかかわらず、歴史のぜんたいについて、みとおしをもつことの必要を、わたくしは、個別研究をふかめていく過程で、ますますつよく、感じないわけにはいかなかったのである。歴史の個別研究は、そういうみとおしの、媒介によってはじめて、現代にいきてくるように、おもわれる。」（まえがき）

この書の特徴の一つは、「社会思想とは何か」という問題を出し、「社会思想の歴史的なみとおしをつうじて、それの理論的はあく、すなわち、イデオロギーの理論を、かたちづくることを、意図した」ことである。著者は唯物史観の立場に立って、まず、社会とは人間が生産をすることによって生きて行く場合の、人間と人間との結合であるという。そして社会とは、生産の必要上できたもので、その意味では道具の延長とさえ考え得る。そこで道具の変化によって生活資料の生産の仕方が変り、社会は変化する。そして社会と個人とが分離した時に、つまり社会が平等な個々人の結合ではなくなり、社会と個人の自然な同一性を失った時、人は社会を意識し始める。また原始共産社会を除いて、各社会体制の末期、つまり社会の危機の時、その社会の本質にかかる不満が現れ、それが、その社会を全体として認識し、批判しようとする思想と結び付く。かくて人間の意識の三つの段階、つまり人間が生産し生存する事の意識（人間と自然との対立）、自分とは違った人と共に社会にある意識（人間と人間、又は社会の対立）、及び社会内部の異質性が激化したことの意識、また別の社会があるという意識（社会と社会の対立）を経過するのであるが、社会がはっきりと姿を現わすのは第二、第三の段階であって、社会思想とはこの意味での人間の生き方についての思想であるという。ところで資本主義社会となると、これまでの社会と違って経済法則によって運動するのであり（このところ、それ以前の社会の経済法則との関連は不明確）客観的な秩序となって、このような認識の下に成立するのが社会科学であり、これが人間意識の第四の段階である。そして社会科学は社会の機構を客観的に分析し、体系的、理論的であるのに対して、社会思想は主体的、断片的、直観的で、社会科学的な把握が可能でない時にも成立し得る。そしてこの両者、理論と実践、認識と批判、客観的分析と主体的意慾とのたぐいまれな統一を、著者はスミスとマルクスの例に見るのである。

「社会思想とは何か」という問に対しては、これまでもイデオロギーの問題、社会の問題等に関連して、種々の説が行われて来た。水田氏の社会の概念には異論も多かろうし、少ない頁数をもっては万全を期し難いが、社会思想とは社会批判だというような漠然たる考えに対して、それを特に人間の意識の発展と社会科学との関連に於て把握しようという態度は、従来の思想史がとかく思想の紹介記述に終っているのを顧る時、重要なものである。本文も特に社会科学との関連に注意が向けられているが、キリストやルッターの解放思想としての意義を可成強調していること、資本主義精神についてはウェーバー偏重で、トーニーやラスキの反論が閑却されていること、ロックやホッブスについての記述が非常に少ないこと、等が眼についた。

同じ著者になる「社会思想史の旅」は、著者が一年半にわたってイギリスに遊び、スミスその他の思想家の資料を追い、かの地の研究の成果を集めた旅行記であるが、旅の思い出話は別として、新しい資料や学界の消息も知り得て非常に面白い。著者はアダム・スミスのあとを追って、グラスゴー大学その他スミスの蔵書を見て歩いたが、その保管の状態は「忘れられたスミス」を感じさせるに十分であったという。グラスゴー大学にスチュアート版五巻のスミス全集がない。エディンバラのニュウ・カレッジ図書館にあるスミスの蔵書は、利用する人もなく数十年の塵にまみれている。スミスが一七七八年から一七九〇年まで住んでいたパンミュアの家は、屋根も壊れたあばら家で、掠奪にまかせられているという。水田氏はスミスの散らばった蔵書を求めて、ボナーの「アダム・スミス蔵書目録」にない書をいくつか「発見」している。

そしてスミスについての研究も、スコット以後のイギリスでは、ミークとグレイの論文を除いては研究という程のものはなく、経済学的研究には歴史意識の欠如を感じ、歴史的研究には、問題意識の貧困を見出す。つまり経済学史と社会思想史との分裂であるという。この点においてマルクス主義の側からの研究も同じで、ミークにおいてスミス―リカード―マルクスの発展が直線化され、スミス

とマルクスが共にリカード化される。このような問題意識においては、確かに「スミスで飯の喰える」「リジッドな」日本の学界の水準の方が、歴史の総体的把握の故に、優れているようである。

著者はまた、スミスの経済学、道徳哲学との関連において、ロード・ケイムズ、ヒューム、オズワルド、ジェイムズ・スチュアート、タッカー、ドウガルド・スチュアート、バーク、ペイン、ハチスン、ファーガスン、リード、ロバートスン、ミラー、バーンズ等にも眼を向ける。これらの研究は日本では殆んど無いし、経済学史や思想史における個人崇拝の傾向は依然強いから、これらあまり取り上げられざる資料の紹介は貴重なものである。その中では特に、ペインを中心とする急進主義にくわしい。ペインの抽象的理性は、歴史(過去)と断絶するもので、そのような合理主義は両刃の剣であり、一方でこれまでの奴隷状態からの絶縁であると同時に、他方で創造のためのプログラムが現実の中に基礎を持たぬ。このような歴史感のない革命的合理主義は、同時に経済学のない急進主義である。そして歴史と経済学とも結び付いていないので、ここに歴史意識、合理主義、経済学のトリロジーが形成される。

氏は更に、新しい論文「社会主義思想の成立――資本主義批判の展開過程――」(岩波講座・現代思想Ⅳ・新しい社会所収)において、資本主義批判の歴史を通じて、階級的な分析の上に、この歴史意識の進んだ考察を行っている。すなわち、農民運動における共同体擁護論は、単に復古的反動的であるのではなくて、農民生活の共同防衛思想であり、資本主義による人間の孤立化、畸型化、物格化への批判であり(貧農の運動 Diggers のごとく)、スペンスにおいては社会主義と接続する。これに対して、ホッブスは、かかる共同体的束縛から全く自由なアトム的個人から成る社会を考え、独立生産者の中で産業資本家に上昇する部分だけを見たロックもスミスも、共同体的要素からは免れていた。そしてこの段階では、共同体や伝統へのアッピールは、むしろバークの保守主義に転化した。これに対立するものとして、没落小生産者ペインの革命的理性が登場するという(Hill: The Norman Yoke,—Democracy and the Labour movement, Essays in Honour of Dona Torr, 1954 からきわめて大きな示唆を受けているが、この点では氏の意見はヒルと異なる)。

このような考えは、まだ著者にとって課題であるにすぎないそうであるが、マルクスに至るまでの思想の流れを系統的に把握する上に、興味ある光を投げかけるであろう。殊に、経済学と急進主義の関係を論じたあたりは、示唆に富むものである。但し、このトリロジーは単純な分裂ではないので、歴史意識とは共同体への郷愁のみではないし、ペインと共通する抽象的理性は、一面では(ブルジョア・イデオロギー)感覚的快楽主義、功利主義として経済学と結び付き、他方では(小ブルジョア・イデオロギーとして)合理主義、社会批判と結び付く。更に、この理性の発展過程分析のために、自然法と功利主義の関係もこの際重要な意味を持つのではなかろうか。(「イギリス社会思想史概説」二八〇円、関書院・「社会思想小史」二六〇円、ミネルヴァ書房・「社会思想史の旅」二五〇円、日本評論新社)

(白井 厚)

経済学関係文献目録

(昭和三十一年十二月〜昭和三十二年一月刊)

理論・学説史・経済思想

*後進国の経済発展と経済機構 M・ドップ著 小野一一郎訳 B6 一四六頁 一九〇円(有斐閣)

*イギリス古典経済学 R・L・ミーク著 吉田洋一訳 B6 一九九頁 二〇〇円(未来社)

*資本論の弁証法 M・M・ローゼンターリ著 飯田貫一訳 B6 二五〇頁 二九〇円(青木書店)

*経済分析の歴史 2 J・シュムペーター著 東畑精一訳 A5 三六四頁 七五〇円(岩波書店)

*シュムペーターの経済学 吉田昇三著 B6 二〇七頁 二五〇円(法律文化社)

*恐慌論体系序説 高木幸二郎著 A5 三七五頁 五八〇円(大月書店)

*経済学と経済政策 M・ブランス、G・アルダン著 森有正・横山正彦訳 A5 三一一頁 四五〇円(日本経済新聞社)

*経済学入門 増補改定 R・ルクセンブルグ著 高山洋吉訳 B6 三八五頁 三八〇円(日月社)

*日本の社会主義 社会主義講座 7 大河内一男・向坂逸郎・高島善哉・都留重人・名和統一編 A5 二九四頁 二八〇円(河出書房)

*資本論解説(マルクス・エンゲルス選集14) 向坂逸郎編 B6 三三一頁 二八〇円(新潮社)

*近代経済学の理論構造(講座近代経済学批判2) 遊部久蔵・横山正彦・末永隆甫・宮崎義一編 A5 三二〇頁 三八〇円(東洋経済新報社)

*ロッシャーとクニース 2(社会科学ゼミナール) M・ウェーバー著 松井秀親訳 B6 一七一頁 一九〇円(未来社)

*消費函数の研究(阪大社会経済研究室叢書) 高田保馬著 A5 一四八頁 二〇〇円(有斐閣)

*経済変動の理論 吉田義三著 A5 二三八頁 三五〇円(日本評論新社)

*日本資本主義論争の現段階 小山弘健著 B6 二九二頁 二九〇円(青木書店)

*人口過剰論批判 上杉正一郎編著 B6 二〇三頁 二七〇円(日本評論新社)

*戦後景気循環の研究 井汲卓一著 A5 三一六頁 六〇〇円(日本評論新社)

*近代経済学 熊谷尚夫著 B6 二八七頁 三三〇円(日本評論新社)

統計学

*統計調査要覧 美濃部亮吉・松川七郎編 B6 四六六頁 六八〇円(東洋経済新報社)

*統計学 経済学全集 有沢広巳・内藤勝著 A5 二四八頁 三〇〇円(弘文堂)

歴史

*古代末期政治史概説 上――古政末期の政治過程および政治形態――石母田正著 A5 三九一頁 四五〇円(未来社)

*中国歴史概要 翦伯贊・邵循正・胡華編著 波多野太郎訳 B6 二六二頁 二〇〇円(一橋書房)

*世界史講座 7 平和への道 上原専禄・江口朴郎・尾鍋輝彦・山本達郎監修 A5 三二二頁 三七〇円(東洋経済新報社)

*明治文化史 8 開国百年紀念文化事業会編 A5 六五〇頁 一五〇〇円(洋々社)

*近代ヨーロッパ政治史 全訂版 岡義武著 A5 二四〇頁 三二〇円(弘文堂)

*近世漁村史料の研究 野村豊著 A5 四九九頁 一一〇〇円(三省堂)

*時代区分上の理論的諸問題――歴史学研究会一九五六年度大会報告――歴史学研究会編 A5 一七九頁 二二〇円(岩波書店)